



Title	近代における祇園祭屏風祭の変遷
Author(s)	岩間, 香
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 71-84
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53282
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代における祇園祭屏風祭の変遷

岩 間 香

摂南大学

キーワード

祇園祭 屏風 近代 日本画

The Gion Festival, Folding screen, Modern era, Japanese painting

1995. 7. 14. 受理

1. 屏風祭の発展——明治前期
2. 屏風祭の隆盛——明治後期
3. 新しい展開——大正前期
4. 減少と固定化——大正後期以降

屏風祭は祇園祭の宵山に家々で秘蔵する屏風を披露する伝統行事である。現在、山鉾巡行は7月17日に行われるが、昭和41年までは前祭（17日）と後祭（24日）の2回行われていた。前祭は神輿遷幸に伴う下京の祭、後祭は神輿遷幸に伴う中京の祭で、それぞれ宵山に屏風祭が催されていた。明治の初めから第2次世界大戦までは多くの町家で屏風祭が行われており、それらの屏風を見て歩く客に、茶の湯などの接待があったという¹⁾。

山鉾巡行をはじめとする祭行事が国の文化財に指定され、山鉾単位に組織された保存会の手で行われるのに対して、屏風祭はあくまでも個人の自由意志で家や会社を単位に行われる。屏風祭に関してはこれまで断片的な紹介はあるが、歴史的な変遷を考察したものはない。小論では近代における屏風祭の変遷を、主に新聞などの資料をもとに考察していきたい。

1 屏風祭の発展——明治前期

屏風祭が盛んに行われたのは山や鉾を有する山鉾町である。これは姉小路、高辻、東洞院、油小路の各通りに囲まれた地域であるが、元治元年（1864）の大火によって、これらの地域のほとんどが罹災した。明治初期には巡行する山鉾も少なく、祇園祭は低調であったと思われる。当時の屏風祭の様子を伝える資料はほとんどなく、宵山風景を伝える最も早い記録は明治18年（1885）の新聞記事である。それには「氏子の家々は例の幕を張廻し 毛氈を布陳べ 活花を

飾立てなどして神事らしくなし居りし」とあり、屏風祭を思わせる「しつらい」が描写されている²⁾。明治25年には宵山に屏風をめぐらし碁・将棋を楽しむさまが報じられており³⁾、さらに27年には「軒毎に神燈を掲げ各幔幕を張り、金銀書画の屏風を建て廻らし、或は珠簾を垂れ、花氈を敷き、銀燭硝燈を点じ、或は生花、或は盆栽を陳列し以て来賓を饗す」と屏風祭が活気を取り戻しているさまが詳細に記されている⁴⁾。ここにあるようにランプの登場が夜を格段に明るくし、屏風の鑑賞を容易にしたであろうことは想像に難くない。

明治期の屏風祭は、現在よりはるかに広く、八坂神社の氏子町の各所で行われていた。氏子町は中京と下京および近世に付加された川東祇園町である。明治34年の新聞には「石段下以西祇園町両側の如きは幕を張り屏風を引繞らして登楼客の浮れ来るを待顔なり」とあり、屏風祭は祇園新地でも行われていたことがわかる。記事はさらに、四条大橋から御旅所までは幕のみの簡略な飾りであり、山鉾町では再び本格的な飾りであったことを伝えている⁵⁾。

しかし祇園新地では早くに屏風祭がすたれ始め、明治37年には「祇園新地は大抵の家は幕を張つて居つたが屏風を引いた家は七八軒に過ぎなかつた」と記されている⁶⁾。ついで寺町通から烏丸通の間が衰退し始めた。同38年には寺町通と四条通の屏風祭として寺町で5軒、四条で2軒が数えられているが、翌39年には四条烏丸から寺町の間屏風が著しく衰えたと報じられている⁷⁾。こうして明治中期には烏丸以东の屏風祭は減少し、山鉾町周辺の祭になっていった。

明治30年代になると、屏風祭の資料が漸く増えてくる。明治35年7月24日の日出新聞はこの年の後祭における屏風祭13軒33点の画題と画家を報じている(表1)。これは近代の屏風祭がまとまって明かになる最初の例であろう。この表を分析して明らかになる点を以下に挙げたい。まず33点の内、27点までが近世以前の作である。特に「桃山百双内」⁸⁾、雪村、友松、伊年印など近世初期の作とされている屏風が5点ある。また27点中6点が四条派で、京都の町家のあつい支持が明らかになる。つぎに多いのは狩野派を含む漢画および文人画で5点ずつ、ついで琳派の3点と続く。円山派のうちでも応挙は1点しかなく、後述の40年代の屏風祭と様相を異にしている。また狩野派をはじめとする漢画はすべて江戸初期以前の作で、江戸中期以降の作はない。これは京都の町家の人々が、漢画については古いもの以外は関心を示さなかったことを物語っている。また幕末から明治初期にかけての流行を反映して文人画が多いが、そのうち半数以上は江戸中期の蕪村である。俳画の祖としても知られ、日本的な情趣の豊かな蕪村が京の町家では好まれたということであろう。

それらの古画に対して当代の画家は2人しかいない。明治30年に没した岸竹堂と、活躍中の竹内栖鳳の2人である。まず岸竹堂を展示したのは室町きつての老舗千總であった。竹堂は千總の西村總左衛門に絵の指導をする傍ら、友禅下絵を描いており、両者は深い関係にあった。この「牛馬図」は明治28年の第4回内国勸業博覧会に出品するために制作されたもので⁹⁾、

「殖産興業」を隠喩している。一方、竹内栖鳳はまだ38才の若さであったが、抜群の技量で数々の賞をうけ、すでに押しも押されもせぬ大家になっていた。伊藤家の「鳥図」屏風は六曲一双3点、二曲一双1点、同じく二曲一双の小屏風1点の大作で、金屏風にほとんど背景を描かず群をなして飛ぶ鳥を描いたと思われる¹⁰⁾。さきの「牛馬図」に対し、純粹に視覚的な効果を意図した作品で、近代絵画としての性格がより明確である。

画題は古画新画合わせて花鳥画が圧倒的に多い。季節は春、冬などさまざまで、特に夏や祇園祭を意識した画題は見られない。その代わり大規模な連作であったり、特別な由緒をもつものであったり、他では見られない特徴をもつ屏風が多い。すなわち明治35年には屏風祭は概ね家宝の披露であったといえよう。

この屏風祭の紹介記事を書いたのは、村上文芽という日出新聞の美術記者で、画家川村曼舟の兄にあたる人物である¹¹⁾。文芽は記事の最後に、日本画が刷新されようとしている今、画家が屏風祭をみて勉強しないのは残念だ、と述べている。つまり屏風祭を単なる季節の行事や御開帳でなく、美術品を見る展覧会として位置づけているのである。

この時期に初めて屏風祭が詳しく紹介されたのには理由があった。それは美術展の隆盛である。古美術に関しては明治4年の京都博覧会を皮切りに、さまざまな展覧会が催されるようになっていた。同25年からは京都美術協会による新古美術展も始まっている。新画についても、同30年には後素協会が全国規模の絵画共進会を京都で開催するなど、美術展が活発化していた。屏風祭を美術品の展覧会として見直そうという意識が画家や文化人の間で芽生えていたと思われる。加えて祇園祭の美術に対して、関心が高まっていたことも見逃せない。明治21年にフェノロサの意を受けた図書頭九鬼隆一が、山鉾の懸装品を調査している。これは新聞に大きく取り上げられ、祇園祭が古美術品の宝庫として見直されるきっかけになった¹²⁾。35年の記事はこうした背景の中で掲載されたものといえよう。こののち屏風祭の記事には「金屏銀屏」といった慣用句ではなく、画家や画題が具体的に記されるようになる。39年の新聞記事は、四条烏丸から寺町までの屏風祭で見るべきものは大木人形店の「蕭白人物」ぐらいで、「景年の熊に驚」、「松年の人物」は贗物か不出来か、古画にも見るべきものなし、としている¹³⁾。美術展を評するかのよう、展示の内容を厳しく問うているのである。屏風祭を美術展になぞらえる言い方もこの頃から現れた。出雲寺書店がガラス戸の中に屏風をたてたことを、さながら美術館のようであったと報じていることも、見る側の意識を窺わせる例であろう¹⁴⁾。

屏風以外にも、工夫を凝らした飾りが現れた。明治40年に豪商の市田で行われた飾りは、軸、置物、盆栽などが新聞に詳細に紹介され、一品一品がみな名品であるうえに、部屋全体の調和がとれていると、高く評価されている¹⁵⁾。単に所蔵品を見せるだけでなく、部屋全体の組合わせの妙や涼しさの演出が鑑賞の対象になっているのである。屏風祭の演出、さらに鑑賞という

行為が成熟しつつあることが窺えよう。

2 屏風祭の隆盛——明治後期

明治35年について屏風祭が詳しくわかるのは明治44年である。この年の大阪朝日新聞は、屏風祭を行う家として前祭28軒48点、後祭29軒63点を掲載した¹⁶⁾(表2)。この表から明治後期の屏風祭の特徴を探っていこう。まず、ここには今日でもよく知られている多くの名品を見いだすことができる。たとえば後祭の8「等伯の桃山百双柳に橋の図」(現在は香雪美術館蔵)、同18「応挙藤の図」(現在は根津美術館蔵、重要文化財)、同22「山雪雪に水禽」(現在は個人蔵、重要文化財)、同23「応挙保津川」(重要文化財)、同28「応挙雪中松」(国宝)¹⁷⁾など、のちに文化財に指定されている名品が多く見られる。名品が惜しげもなく公開されていたことがこの年の屏風祭の特徴であろう。

また古画と新画を比べると、江戸期の画家が大多数を占め、在世の書画家は富岡鐵斎がいるにすぎない。画派別に見ると円山・四条派が53点と総点数111点の半数近くを占めており、中でも応挙が17点と突出しているのが目につく。逆に文人画と書の割合が35年よりも減っている。これは教養主義的な明治中期の好みに対して、視覚的で分かり易い応挙の写生画が見直されたのではないだろうか。また寛斎、来章、岸派、原派の画家が増えたのは、幕末から明治初期にかけて活躍した画家が、明治の末期になって一定の評価を受け始めたためと考えられる。

さて、この明治44年の資料の価値は、前祭と後祭が揃っていることにある。そこで前後の祭でどのような差があったのかを分析しておきたい。まず、1軒あたりの平均屏風数は前祭が1.7であるのに対し、後祭は2.2である。前祭では5点以上飾った店は1軒だけであるが、後祭では7点が2カ所、6点が1カ所、4点が2カ所と大がかりな屏風飾りをしている店が多い。前後の祭で際立って数に差があるのは応挙である。前祭では2点のみであるのに、後祭では15点もの作品が飾られている。また呉春も前祭1点に対して後祭は5点と多い。さらに漢画や文人画も後祭が多く、穏健な円山・四条派と謹直な漢画や文人画が、後祭のカラーを作っていたと思われる。一方、前祭に多いのは蕭白で、後祭は1点しかないのに前祭は5点もある。また琳派とされている絵も、後祭は2点しかないのに前祭は4点もある。奇矯な画風で知られる蕭白と、華やかな意匠の琳派が、前祭のカラーを形成していたと考えられる¹⁸⁾。先に挙げた指定文化財が、後祭に展示されたものばかりであるのは偶然ではないことが分かる。

ところで大阪朝日新聞は、翌45年にも前祭の屏風祭のリストを掲載している¹⁹⁾。これは軒数にして3倍近い153軒174点にも及ぶ詳細なものであった(表3)。屏風祭に対する読者の関心の高さを示すとともに、実際に屏風祭の数がこの頃、最大になったことを思わせる。しかし1軒あたりの展示数は平均1点と少なくなっており、また画家を特定できない屏風が増えている。

屏風祭がいわば大衆化していることが窺えよう。なお、明治45年は前祭の後、病床にあった明治天皇の容態が急変したため、後祭は中止された²⁰⁾。

では屏風祭は実際にどのあたりで行われたのであろうか。これを見るために明治44年、45年のリストを地図上にプロットしたものが図1である。これによると前祭は北は四条上る、南は松原通、西は油小路通、東は寺町通まで行われ、山鉾町と山鉾の巡行経路に集中していることが分かる。また後祭は北は二条通、南は蛸薬師通、西は油小路通、東は寺町通まで見られ、やはり山鉾町と山鉾の巡行経路に多いが、山鉾町からかなり隔たった所でも行われている。これは後祭のおり、神輿が氏子町をかなり広く渡御することと関係しているのであろう。こうした傾向はサンプル数が多い45年の方が、より明確になる。但し前年の前祭に比べて烏丸通、東洞院通に特に増えているのは、この年の6月に烏丸通が拡幅され、市電が開通したこととも関係があるだろう。

こうして明治44年の資料からは名品が展示されていたこと、45年の資料からは屏風祭を行う家が増加したことが窺える。明治35年に比べて円山派と幕末明治の画家が増え、視覚的な絵画や近代の画家が好まれ始めていることが明らかになる。また屏風祭は山鉾町だけでなく、山鉾の巡行経路において行われていた。屏風祭の詳細なリストが新聞に掲載されるのが明治44・45年のみであることは、この時期、屏風祭がピークに達していたことを示している。

3 新しい展開——大正前期

屏風祭の飾りは近代になって、さまざまなものが付加された。明治10年代に初めて記録された盆栽や活け花は、同38年には貸し盆栽屋が登場するほど流行し、これが下火になると朝顔、ついで西洋花が流行した²¹⁾。また明治30年頃から碁・将棋盤が増え、34年にはほとんどの家で盤が置かれるようになった²²⁾。さらに37年頃にはランプ、テーブル、婦人用イスなど、洋風の家具が金屏風と共に置かれている²³⁾。

さらに明治38年あたりから宵山に楽隊や造り物が登場する²⁴⁾。同40年代に蓄音機が普及し始めると、多くの屏風祭で蓄音機を鳴らすようになった²⁵⁾。これらの音曲は大正14年にラジオの本放送が始まると、ラジオへと変化している²⁶⁾。またロシアの軍艦が沈没する造り物、トップモードの人形飾り、飛行機の造り物など、時事や流行を敏感に反映した造り物が現れた²⁷⁾。最新の機器やトップモードを取り入れた飾りは、祭における風流の精神を受け継ぐもので、都市祭礼の特徴といえよう。新聞記事の性格として、新しい動き、変わったもの、人々の関心の高いものが多く報道される傾向がある。これらの飾りが明治後半から大正の初期にかけて大量に報道されるのは、大衆がこれらの目新しい飾りを喜んで迎えたことを窺わせる。宵山の飾りは流行を取り入れ、毎年変わった趣向が凝らされる活気に満ちたものだったのである。

こうした新しいものを求める精神は、屏風祭の屏風にも現れた。当時、日本画壇は大きな変革を遂げていた。その幕開けとなったのは明治40年の文展開催である。京都画壇からも栖鳳以下3名が審査員になり、以後は東京画壇に拮抗し、京都の画家がめざましい活躍を見せている。すなわち美術に関心をもつ人たちの目は、当代画家の活躍に注がれるようになった。大正3年(1914)の新聞は、栖鳳、芳文、華香、桜谷、松年、景年、直入の作品が展示される屏風祭を紹介している。また春挙、香嶠、鐵斎、竹邨、介堂らは残念ながら屏風祭では見るができない、と付け加えている²⁸⁾。ここに名前を挙げられた画家達こそは当時の人気画家であり、彼らの作品が屏風祭で期待されていたことが分かる。この頃新聞は、屏風祭に出てくる古画は決まり切ったものだ、これらは展覧会や刊行物でも紹介される、今日の数寄者は屏風祭においても古画だけでなく新作を見たがっていると述べている²⁹⁾。

この頃から屏風祭のために新たに画家に屏風を依頼することが、京都の富商の間で流行し始めた。例えば大正4年には吉田忠三郎が横山大観と谷口香嶠に大作を依頼している。新聞は制作段階で詳しく報道しており³⁰⁾、大観がこの屏風に3月から取りかかり、1隻は東京に帰ってから描き直したことを記している。また香嶠は病をおして久々に大作に挑んだが、宵山当日の搬入となりそうだと予測している。同じ年、荒川商店では前年に完成した都路華香筆「竹図」屏風が公開された。これは六曲五双と二枚折一双半に、筍から竹叢にいたる竹の一生を描いた大作で、それまで名物とされていた栖鳳の「鳥図」屏風五双や、大正2年にできた春峰の「竹図」屏風五双を凌駕するものであった³¹⁾。第1次大戦後の好況を背景に、大商店は一流画家に大作を依頼し、画家も力作を描いて応えたのである。

こうした華々しい新画制作が新聞に報道されていた大正5年に、雑誌『新京都』が屏風祭の「相撲見立」を掲載したという³²⁾。日出新聞の記事によれば、これは東の大関を内貴清兵衛の「応挙の龍虎」、西の大関を田中源太郎の「呉春の柳塘漁夫」、横綱を西村總右衛門の「応挙の保津川」とするものであった。日出新聞はこの番付けに対し、新京都ならぬ旧京都だとして、その伝統的な評価を批判している³³⁾。しかしこのことから、常に新しい動きを報道する新聞に対して、一般には古典に対する評価も健在であったことが窺える。

しかし、こうした新画制作も、主だった商店に作品が行き渡ると、大きな話題作が少なくなった。個人や商店に代わり、屏風祭における新画制作の主役になったのは表具商である。当時の表具商は今日の美術商的な役割を果たしており、屏風祭における表具商の展観は早くから行われていた。すでに明治36年、村上文芽は表具商の春芳堂が屏風祭に桜谷、栖鳳、華香、呉曉など多数の新画屏風を並べたことを記し、「古名家の作品は各豪商に訪ふべきなり 流行の趣く所を見んとする者は春芳堂の如き表具師を訪ふべし」としている³⁴⁾。大正3年には春芳堂に続き墨光堂も新作による屏風祭を始めた。同5年には栖鳳の新作軸を中心に当代画家の作品を

並べた春芳堂と、竹泉の書による煎茶道具一式を調えた墨光堂の競演が新聞に大きく紹介されている³⁵⁾。翌6年にはさらに多くの表具商が参入し、さきの春芳堂、墨光堂に加えて吉田堂、友株堂、藤田団扇堂らが新画の展示を競ったのである³⁶⁾。

こうした表具商の展示は当初は屏風祭らしく屏風中心であったが、大正6年には掛け軸のみの展示となり、そのまま新作展示会として販売されている³⁷⁾。こうした展観は純粋な屏風祭とはいいがたく、事実、大正末期になると屏風祭という言い方をしなくなった。しかし屏風祭の時期に表具商や美術商が主催して展覧会を行うことは一般化し、15年には「後の祇園会に因んだ賑やかな個展のいろいろ」として方々の個展が新聞で紹介されている³⁸⁾。

新画は盛んに制作されていたが、それは表具商の依頼によってであり、個人の屏風祭の為ではなかった。大正6年、春芳堂は屏風祭に土田麦僊、小野竹橋（竹喬）といった青年画家の軸の展示を行ったが³⁹⁾、これらの画家が翌年、帝展に反発して国画創作協会（国画会）を創立したメンバーであったことはいうまでもない。国画会は全国的にセンセーションをまきおこし、麦僊らはたちまち画壇の寵児となる。しかし彼らが屏風祭に新作屏風を描いたという記録はどこからも見出せない。個人が行う屏風祭は画壇の最新の動きを反映しなくなっていたのである。さらに古画についても「入札の下見会が度々あるので」「御屏風拝見も昔程に重んぜられぬやうになった」とあり⁴⁰⁾、屏風祭にはもはや美術展としての役割がなくなりつつあったことが明らかになる。

以上をまとめると、大正初期には好景気を背景に屏風祭に新画を制作することが流行し、明治後期に引き続き屏風祭が盛んであった。しかし作品が行き渡ると新作は表具商が行う展覧会において発表されるようになり、個人の屏風祭は固定化されていったと考えられる。

4 減少と固定化——大正後期以降

大正9年3月に始まった経済恐慌は、室町にも大きな打撃を与えた。屏風祭に数双の屏風を並べていたような大商店が大量に倒産したのである。同13年の日出新聞は「名物の屏風 影が薄くなった」と題する記事を掲載し、中京の旧家2軒が名物屏風を手放したことを報じている。その上で現在見ることのできる屏風として内貴清兵衛の華香筆「閑雲野鶴図」、湯浅寿太郎の栖鳳筆「山水図」など6カ所の名物屏風を紹介し、さらに本年新調のものとして渡邊郁二の廣田百豊筆屏風を挙げている⁴¹⁾。また同じく13年の記事は明治期の屏風祭を回顧し、かつていい屏風が沢山あったが、今では「山楽の桃山百双の屏風」などは中京で見られない、としている。そしてかつて有名であった7カ所12点の屏風について、現在の所蔵者などを紹介している。この12点の内「景文の春秋の一双屏風」、「桃山百双のうち（山楽の落款入り）」、「呉春の漁夫の図」、「金地松並木の十双屏風」は明治35年のリストに含まれていた名品であった。ちなみに景

文は大正9年の入札、呉春は最近の入札で5万円以上の値で売り立てられたとある⁴²⁾。

このように大正後期には不況で名品の多くが入手に渡り、屏風祭では見られなくなっていた。しかし屏風の新しい所蔵者が報じられたり、1例ではあるが新作屏風が紹介されていることは、未だ屏風祭に対する関心が保たれていたことを示している。それに対し、かつて新聞を賑わせていた新奇な造り物に関する記事は、大正後期になるとまったく見られなくなる。蓄音機も大正5年以降下火になり⁴³⁾、祭が伝統的なものに回帰するとともに、固定化が始まったことを思わせる。

この頃から祇園祭を記す新聞記事の論調が変化していく。祭の1週間位前から特集を組み、江馬務、吉川観方、田中緑紅などの学者や有識者が祇園祭の歴史を解説したり、昔の祭を回顧する記事が増え始めた。こうした解説が増えた原因のひとつとして、祭の存続が深刻な問題になってきたことが挙げられる。明治以来、山鉾町はどこでも祭の執行や修繕の経費に苦しんできたが、大正後期になると巡行が不能になったり、転売が危惧される山鉾も現れた。こうした状況を救うため、大正12年に山鉾連合会が結成され、連合会に対して京都市から補助金が支給されるようになった。祇園祭は保護されるべき伝統的文化財と見なされるようになったのである。

また回顧記事が増えた原因として、祭をめぐる環境が大きく変化したことが挙げられる。明治35年頃から三条通や烏丸通に近代的なビルが建ち始め、45年には四条通と烏丸通が拡幅され、市電が開通した。大正4年には全国初の電灯の街灯が四条御幸町に設置されている。新聞には鉾が小さく見える、電灯の明かりで引き立たない、京都情緒が壊滅と記され、「祇園祭改造論」も盛んであった⁴⁴⁾。急激な都市化は伝統的な形式を保持する祇園祭の存在感をかえって際立たせる結果になったと思われる。

昭和になると都心の過疎化による祭の維持が早くも問題になっている。例えば四条烏丸の長刀鉾町は、ビル化が進み昭和3年(1928)にすでに10戸に満たない町となっていた⁴⁵⁾。町家のビル化、戸数の減少は当然、屏風祭の減少を招いたと思われるが、屏風祭に関する具体的な記事はほとんどない。裏を返せば目新しい飾りが無くなり、伝統的な形態によって少ない家数で続いていた、ということであろう。そして戦況の悪化した昭和18年からは鉾が建てられなくなり、屏風祭も中断するのである。戦後に山鉾巡行が再開するのは昭和22年のことであった。戦争による中断と社会的な混乱は、補助金もなく個人で行う屏風祭に大きな打撃を与えた。近年の調査では戦争以降、屏風祭を取りやめたという家が少なくない⁴⁶⁾。明治から戦前にかけて続いていた屏風祭はひとつの区切りを迎えたといえるであろう。

以上、明らかにしたところをまとめると、屏風祭は明治後期から大正初期にかけて隆盛を迎

えた。明治期の屏風祭の特徴として名品が展示されたこと、大正期の特徴として新画が制作されたことが挙げられる。そして屏風祭隆盛の背景には美術展が盛んになったこと、文化財に対する関心が高まったことなどがあつた。また屏風祭の行われる地域は明治前期には氏子町全域に渡っていたが、明治後期に山鉾町の祭となった。山鉾町内では山鉾巡行や神輿渡御の道筋で屏風祭が行われることが多かった。宵山には屏風以外に新機軸の造り物や音曲などがあり、活気に満ちた催しであつた。しかし大正後期に入ると屏風祭は固定化し、新奇なものを排した伝統行事として行われるようになった。

屏風祭の隆盛と沈滞は経済状況のみならず美術界の動向、環境の変化が密接に関係していた。祇園祭と屏風祭は好況と不況の波を受けつつ今日まで伝えられている。歴史的な変遷を振り返ることは、今後の祭のあり方や、画壇や町の関係、現代の社会が抱えるさまざまな問題を考えることにもなる。最近の屏風祭は、伝統を守るだけではなく、新しい工夫をした飾りも現れている。戦後の屏風祭については稿を改めて詳しく論じたい。

注

- 1) 屏風祭は奥の間に屏風を飾り知人を接待するもの、店の間で通行人に見せるもの、土蔵にまで招き入れるものなどさまざまなやり方があつた。小論が主たる資料としている新聞では店の間飾りが取り上げられていることが多い。
- 2) 『中外電報』明治18・7・23
- 3) 『日出新聞』明治25・7・17
- 4) 『京都祇園会図絵』明治27年刊
- 5) 『日出新聞』明治34・7・14
- 6) 『日出新聞』明治37・7・18
- 7) 『日出新聞』明治38・7・18。その理由として日出新聞は、もともと好事家の少ない区間であること、すぐれた屏風が「他地方」へ売買されたことを挙げている（『日出新聞』明治39・7・19）。
- 8) 屏風祭に展示される屏風のうち、桃山期の作と考えられる何点かを指して「桃山百双」と称した。
- 9) 大橋乗保作品解説『岸竹堂』滋賀県立近代美術館・京都新聞社、1987
- 10) 現存する栖鳳筆「烏図」屏風から推察される。
- 11) 村上文芽（1867～1930）は後に日出新聞に近代京都画壇史の草分けである「絵画振興史」を連載。『近代友禅史』などの著書もある。弟曼舟（1880～1942）は山本春挙の門。春挙の画塾である早苗会の名は文芽が付けたという。
- 12) 『中外電報』明治21・8・8
- 13) 『日出新聞』明治39・7・19
- 14) 『日出新聞』明治38・7・25
- 15) 『日出新聞』明治40・7・25
- 16) 『大阪朝日新聞京都付録』明治44・7・12, 18
- 17) 「三井八郎次郎」（油小路二条）は三井本家の内の南家であるが、北家に伝来した「雪松図」を展示している。北家は明治初期に東京に移転しており、「雪松図」も東京に移されていた。しかし三井家蔵品はしばしば各地で展覧されており、ここでは屏風祭のために京都に運ばれ、南家で展覧されたものと考えられる。田沢裕賀氏の御教示による。
- 18) 前祭と後祭のカラーを、新聞は「氏子が四条から三条へ中心の移つた丈に趣をかへた、即ち四条わたりは派出で花やかであつたが 後の祇園会は地味な代りに品がよく、京都両大通りの気風を僅のことに見せてゐるのが面白い」と評している（『大阪朝日新聞京都付録』明治44・7・25）。
- 19) 『大阪朝日新聞京都付録』明治45・7・16

- 20) 明治天皇はこの年7月30日に没している。
- 21) 『日出新聞』明治38・7・25。これらの碁・将棋盤は、店の者や宵山に訪れる客が楽しむために置かれていたのである。
- 22) 『日出新聞』明治37・7・18
- 23) 『日出新聞』明治38・7・25
- 24) 『日出新聞』明治40・7・25
- 25) 『日出新聞』明治45・7・18。蓄音機は当初、祇園囃子を流していたが、流行の浪花節にとって変わった。西岡陽子「宵山飾りの民俗空間」(『まち祇園祭すまい』思文閣出版・1994)による。
- 26) 『日出新聞』明治45・7・18
- 27) 『日出新聞』明治44・7・15
- 28) 『日出新聞』大正3・7・15
- 29) 『日出新聞』大正4・7・15
- 30) 「室町四条上る吉田忠三郎氏にも今度二双の新屏風が出来て祇園祭に飾られる。大観氏の寒山拾得(二曲一双)、香嶠氏の橋弁慶(六曲一双)である。大観氏は之を描くべく三月、客をさけて垂水の別荘に立籠た。落成してから左(拾得)が気に入らぬとて更に東京で描直し、漸く得心したのである。香嶠氏の金地で久振の大画面揮毫とて近来病弱の氏には非常の努力で四月以来着手し右の弁慶の方は出来たが左の牛若は十六日正午には必ず引渡すとて数日来昼夜兼行の有様であった。この二双も亦青年画家は見ねばなるまい」(『日出新聞』大正4・7・16)。香嶠はこの年12月に没しており、『京都美術』38号は追悼記事に最後の力作としてこの屏風の写真を掲載している。
- 31) 荒川では昭和37年にビルに建て替える際、この屏風の寸法に合わせて1階のエントランスの大きさを決定したという。現在でも屏風祭に陳列されている。
- 32) この年度の『新京都』は国立国会図書館、京都府立総合資料館、京都市立中央図書館など、主要な図書館には収蔵されていないので、雑誌の所在について御教示を賜りたい。
- 33) 『日出新聞』大正5・7・17
- 34) 『日出新聞』明治36・7・24
- 35) 『日出新聞』大正5・7・24
- 36) 『日出新聞』大正6・7・24
- 37) 大正8年の吉田堂には契月の新作がならび、宵山にもならぬ内から同業者が買いにきた、とある。(『日出新聞』大正8・7・23)
- 38) 『日出新聞』大正15・7・23
- 39) 『日出新聞』大正6・7・24
- 40) 『日出新聞』大正6・7・24
- 41) 『日出新聞』大正13・7・24
- 42) 『日出新聞』大正13・7・24
- 43) 『日出新聞』大正5・7・18
- 44) 「四条通りの如きは道路が非常に広くなり、銀行や会社の大建築なども出来て折角巡行しても其の全体の眺めが著しく小さくプーアに見做されるやうになって来た、閑かな提灯を点けても周囲にはより以上に明るい電燈の光りが煌々として居るのであるから一向に引き立たない、従前のやうに街路を曳き歩くにしても電車や電線が邪魔になり、行人も繁くなつて是れ又余程困難になつて来たやうである」(『日出新聞』大正2・7・26)。同様の内容が『大阪朝日新聞』同・7・27にも掲載される。
- 45) 昭和3年、一般に町内の戸数は3-40~7-80戸が平均であった。長刀鉾町は銀行や会社のビルが土地を買収し10戸に満たない状況であった。神事当番も昔は町内を4分割して順次行つたのに、近年2組となり、本年から町内全部が常任当番である。店員を動員するのも2商店店で、鉾に慣れた人が漸次なくなっていく、と住民が語っている(「町内評判記」『日出新聞』昭和3・7・15)。
- 46) 平成5年度屏風祭におけるヒヤリング調査による。

〈付記〉

小論は、第140回意匠学会例会(1994年7月9日)における口頭発表に、加筆訂正したものである。

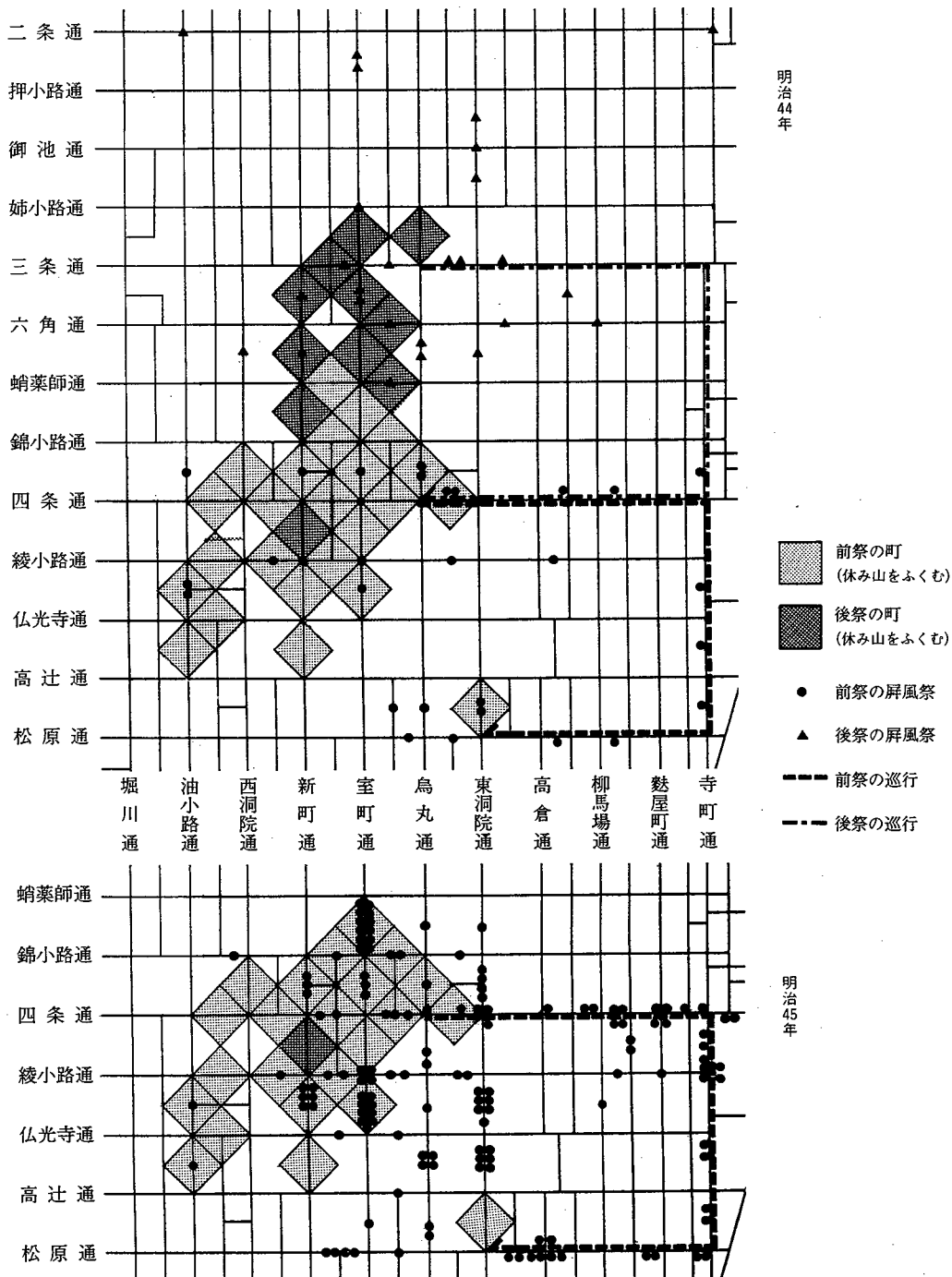


図1 明治44年・45年の屏風祭の分布

表1 明治35年の屏風祭

1	塩重 室町六角 下る東側	景文筆 桜紅葉屏風 一双 仏頂和尚面 黄檗悦山外九人賛 書画張交二枚折 一隻 蕪村筆 金地墨柳八曲風呂先 一隻 同筆 寒林鳥禽二枚折 一隻
2	山田 鳥丸六角 下る東側	筆者不詳 金地極彩色竹画二枚折 一隻 同 (桃山百双内) 白鳥に柳 一隻 山楽仲 虎豹金屏風 一隻 伊年筆 百神金屏風 一双
3	市田 六角東洞院 東入南側	吳春筆 漁夫 二双続 (但し一双同様の砂子地にて無地なるもの其左 右に補はる)
4	福田 六角富小路 西入南側	蕪村筆 山水屏風 一双 景文筆 松鶴屏風 一双 松翁筆 七言屏風 一双
5	鳩居堂 寺町御池角	大雅堂 山水屏風 一双 (一双を圓く引く時は景色の首尾聯絡する事バ ノラマの如し 香の時に用ひん為に同家先 代が描かしめしとの事)
6	下村大丸 東洞院 押小路 下る	公順雪澤兩筆 極彩色松林金屏風 十双 (尚別に同屏風数双あるも店に引き切れざるゆ ゑ土蔵に納めありと)
7	内貴 同町東側	守信筆 山水金屏風
8	細辻 三条東洞院 西入北側	吳春筆 徒然仲二枚折 一双 文麟筆 水墨嵐山、加茂、清水、祇園 金屏風二双 光起筆 大江山園小屏風 一双 始興筆 夏仲秋仲屏風 一双
9	遠蔵 同町	等有筆 竹牡丹金屏風 一隻 雪村筆 虎溪三笑、韓退之図屏風 一双
10	千總 三条鳥丸 西入	素絢筆 やすらい祭屏風 一双 友松筆 琴棋書画屏風 一双 南嶺筆 群鹿屏風 一双 蘆雪筆 牧童二枚折 一双 竹堂筆 牛馬八曲屏風 一双
11	千治 三条西入	筆者不明 夏秋 同 桜 同 麝香猫、極彩色金屏風各一双
12	伊藤太 鳥丸三条 上る	応挙筆 松鶴金屏風 一双 (亀岡藩侯が応挙を召して描かしめし三双の内 にして一双は三井家に在り他は所在不明) 尚信筆 松竹梅屏風 一双 光琳筆 竹四曲金屏風 一隻
13	伊藤 室町押小路 下る西側	栖鳳筆 鳥金屏風 三双 同 二枚折 一双 同 銀小屏風 一双

表2-1 明治44年の屏風祭一覧 前祭

1	飯田本宅	諏訪町松原上る	稲嶺筆水墨群鯉／光琳極彩色地紙 散し／宗達の極彩色の四季草花
2	磯野直吉	松原源訪町東	時代屏風吉野図／ 又平の東海道五十三次
3	初田甚吉	鳥丸松原上る	貫名海屋の書
4	宮本儀助	松原不明門角	稲嶺極彩色密面の虎に獅子／ 豊彦の水墨山水
5	保昌寺山町	東洞院松原上る	応挙の水墨保昌寺山脚巻下面
6	上羽庄太郎	同町	素絢保津川
7	河長	松原堺町西	景文の花鳥
8	紀藤兵衛	松原柳馬場東	素絢四条破の納涼／景文の花鳥
9	大六	寺町松原上る	景文の鷺と鳥
10	岡村興助	寺町高辻上る	岸進山獅子
11	西村彦兵衛	寺町綾小路下る	光琳草花／直入山水
12	三木安二郎	寺町四条上る	光琳極彩色扇尽／太宰春台書
13	下村油店	四条柳馬場東入る	大雅書
14	大木平藏	四条堺町	簞白極彩色子供遊／ 大雅極彩色松竹梅
15	小林嘉助	綾小路高倉東	簞白の款中八仙／蘆雪三十六歌仙
16	荒川益次郎	綾小路東洞院西	寛斎人物／小野湖山書
17	廣岡伊助	綾小路室町下る	簞白七賢人／同六歌仙
18	山崎三五郎	綾小路室町	宗達四季草花
19	岡島卯三郎	新町綾小路	宗達極彩色菊尽し／月霞の仙人／ 古代画の張交
18	杉本具服仕入店	綾小路新町西入	蘆雪獅子
19	竹中半次郎	油小路仏小路上る	探幽龍虎
20	森治兵衛	同町	極彩色京名所
21	宮井傳兵衛	油小路四条上る	応挙富士巻狩／宗達四季草花
22	村田重二郎	新町四条上る	光琳百花
23	吉田忠三郎	室町四条上る	探幽瀟湘八景／土佐光茂車争の図 在中四季花鳥(孝明帝より拝領)／ 時代屏風八島合戦／ 光起源氏五十四帖
24	下村忠兵衛	鳥丸四条上る	簞白唐子遊／蕪村雪中松／ 横山華山の唐子遊
25	西堀清兵衛	同町	幽汀唐人物
27	井上五郎兵衛	四条鳥丸東	源琦金地に松
28	湯川藤兵衛	同町	海屋いろはは四十八文字
29	大橋正之助	錦小路鳥丸東	寛斎蒨地胡粉の富士

後祭

1	伊藤仕入店	新町蛸薬師上る	探幽の山水／軍鶏
2	澤渡源兵衛	西洞院蛸薬師上る	曾文の鹿
3	藤木萬助	新町六角上る	光琳（応挙模写）百花／ 呉春の雨中柳
4	深見小兵衛	室町三条下る	寛斎雪中浜に鶴
5	吉田重兵衛	同町	景文の花鳥
6	荒川宗助	六角室町東入る	岸駒孔雀
7	小泉善一郎	鳥丸六角下る	簾白の群猷／蘆雪の群仙
8	山田嘉三郎	同町	等伯の桃山百双脚に橋の図
9	山田定七	同町	山楽の虎／光起の群鶴／ 山雪花車の図／宗達百草／ 光琳草花／呉春西湖の図／景文鶴
10	西川幸兵衛	同町	渡辺南岳花卉双鶴
11	平井仁兵衛	蛸薬師鳥丸西	応挙松と梅／寛斎の竹
12	雁半	東洞院蛸薬師上る	光琳菊三双／宗達四季の花／ 応挙傳太子・韓公／ 同六歌／仙吳春松／東洋扇流し
13	市田理八	六角東洞院東	大雅閔帝祭／呉春漁夫
14	外村定次郎	堺町六角上る	山楽犬追物
15	福田市十郎	六角柳馬場	蕪村山水／景文松に鶴／応挙山水
16	山田啓助	寺町二条	応挙鶴の図
17	山田定七	東洞院御池上る	岸駒龍／応挙虎／蕪村山水／ 応挙鶴／呉春漁夫／海屋山水／ 来章春秋
18	山田長左衛門	御池東洞院	応挙藤の図
19	内藤	東洞院御池下る	松翁柳／曾文山水
20	川島甚兵衛	三条東洞院東	応挙四季花鳥／同芭蕉南天
21	中井三郎兵衛	三条東洞院西	連山競馬／蘆雪人物
22	細辻伊兵衛	同町	山雪雪に水禽
23	西村總左衛門	三条西門町	岸駒孔雀／友雪人物／応挙保津川
24	西村治兵衛	三条室町西	蘆雪巨象戯児
25	稲垣藤兵衛	室町姉小路角	蘆雪唐子游
26	矢代仁兵衛	室町二条下る	応挙四季草花／素駒草花
27	清水半兵衛	同町	探眞駒向／連山舞臺／ 友雪瀟湘八景／素駒耕作
28	三井八郎次郎	油小路二条	応挙雪中松／四季山水／群鶴／ 応挙十哲押絵張

表 2 - 2 明治44年の画派の分類

	前祭	後祭	計
円山四条	17	36	53
琳 派	8	5	13
漢 画	3	9	12
文 人 画	3	4	7
諸 派	7	6	13
古 画	5	3	8
書	5	0	5
計	48	63	111

表 3 - 1 明治45年の屏風祭一覧

1	平井	鳥丸四条上る	日本押絵張
2	高山	錦鳥丸西	呉春山水／光琳二枚折／孝敬虎
3	松村	錦鳥丸西	呉春松
4	小泉	錦鳥丸西	海屋書
5	富田	鳥丸錦上る	永納松に鶴
6	小林	室町錦上る	竹堂柳に鳥
7	荻田	室町錦上る	丈山の書
8	桑原	室町錦上る	岸良の鷺
9	瀧定	室町錦上る	短冊の張交
10	内藤	室町錦上る	松翁の書
11	井上	室町錦上る	光琳松に鹿／桃山百双扇流し
12	塚本	室町錦上る	幽汀押絵張
13	藤井	室町錦上る	文麟鶴
14	白木	室町錦上る	紅石の芭蕉／松翁の書
15	平田	室町錦上る	源章の浪に鶴
16	中川	室町錦上る	清峰松に鷹
17	村田	東洞院四条上る	周信獅子
18	平井	錦室町西	時代屏風大江山の図／宗達の菊／ 益信の菊／景文の桃花
19	外村	錦室町西	曾文の押絵張
20	石沢	室町四条上る	未詳牡丹
21	中橋	室町四条上る	未詳二十四孝
22	寺尾	室町四条上る	呉春海濱鶴
23	黒部	四条室町西	伝山楽既の図
24	東甲介	四条室町西	順月押絵山水
25	廣岡	室町綾小路下る	宗達萩に鹿
26	東山	室町綾小路下る	蘆雪押絵張
27	笠原	室町綾小路下る	光琳菊に垣
28	西山	室町綾小路下る	時代競馬
29	吉田	室町綾小路下る	群猷
30	大飯	室町綾小路下る	百年唐子遊
31	安盛	室町綾小路下る	時代土佐風
32	南部	室町綾小路下る	周信雁
33	奥井	室町綾小路下る	文麟赤壁の図
34	寺田	仏光寺室町東	松翁書
35	上田	仏光寺鳥丸東	等潤山水
36	古沢	東洞院仏光寺上る	友汀山水
37	東郷	四条東洞院西	米俣孔雀
38	渡辺	四条鳥丸西	岸岱龍
39	阪田	四条新町東	岸駒鷺と虎／連山遊猿
40	永井	錦西洞院西	二十四孝
41	中川	油小路綾小路下る	常建押絵張／時代扇散し
42	森田	油小路仏光寺下る	梅嶺押絵張
43	山内	松原新町東	連山桜紅葉
44	福田	松原新町東	光貞栗に鶴／山楽誰が袖
45	藤井	松原新町東	百年蜀三傑
46	岡村	松原新町東	皆川應書
47	多賀	室町松原上る	宗達二枚折草花／規禮二枚折松
48	石田	寺町四条下る	若冲鶴
49	西村彦	寺町綾小路角	英一蝶押絵張
50	宇野	寺町綾小路角	鐵舟書
51	高橋	寺町綾小路角	義童（童）人物
52	佐竹	寺町綾小路角	若冲鶴
53	村井	寺町綾小路角	米庵書
54	藤森	寺町仏光寺下る	許六獅子牡丹
55	岡本	寺町仏光寺下る	岸徳獅子／岸駒虎

56	下山本	寺町高辻下る	光琳地紙
57	西川	寺町高辻下る	蜀山人画賛免の図
58	藤川	松原寺町西	百年關帝祭
59	田中	松原寺町西	岸禮婦魚
60	駒井	松原懸屋町西	探幽山水
61	小林	松原懸屋町西	古代地紙
62	今村	松原堺町西	山陽書
63	越基	松原高辻西	松翁書
64	奥田	松原高辻西	田信押絵張
65	井筒	松原高辻西	米俣龍虎
66	三上宅	松原高辻	周信山水
67	三上湖月堂	松原高辻	湖山書／俣野始興十二支
68	三上本店	松原高辻	永隆唐人物山水
69	三上孝	松原高辻	九老人物
70	篠田	柳馬場仏光寺上る	梅嶺山水
71	吉岡	綾小路東洞院西	景文花鳥
72	人見	綾小路東洞院西	景文三保富士
73	古川	綾小路烏丸西	蕭白押絵張
74	小島	綾小路烏丸西	古代切扇面形張交
75	河瀬	綾小路室町西	文麟山水押絵張
76	吉岡	綾小路室町西	岸駒竜虎／景文唐子游
77	杉本本宅	綾小路新町西	等舞押絵張／宗達草花八枚折
78	松本	綾小路柳馬場東	海屋書
79	阪根	綾小路懸屋町	寛斎竹林七賢人
80	曾野	寺町四条下る	永納巻狩
81	岡本	寺町四条下る	大雅赤壁
82	常久	四条寺町東	義章南嶺合作／牛若奔鷹五条橋
83	邑林	四条寺町東	義陽、如意、信天翁押絵張
84	紅平	四条寺町西	光貞草花
85	村田	四条御幸町	友広人物
86	杉村屋	四条懸屋町	友草芦に鶴
87	一井	四条懸屋町	応文草花
88	寺島	四条懸屋町	海屋の書
89	森儀	四条懸屋町	蕪村山水
90	小泉	四条富小路西	鉄舟書
91	春井	四条富小路西	文鳳七福神
92	田中	四条富小路西	宗達草花
93	藤本	四条富小路西	常信近江八景
94	和田	四条柳馬場西	米山人押絵張
95	小島	四条柳馬場西	友汀押絵張
96	山本	四条柳馬場西	応孝霧中の松／湖山の書
97	寺田	寺町堺町西	蕪村俳画／山雪山水／景文草花
98	鬼足袋	寺町堺町西	探幽獅子
99	田村	四条高倉	竜虎
100	石田	東洞院四条	玉峰繪／海屋書
101	安達	東洞院四条	岸駒竜虎
102	足田	東洞院四条	吞舟勸進帳
103	小西	東洞院四条	応孝田舎の図／百年二枚折
104	伊藤	東洞院四条上る	虹石山水
105	山口	東洞院四条上る	寛斎草花
106	内藤	東洞院四条上る	岸岱三保松原
107	丹羽	東洞院四条上る	応孝山水
108	大橋	錦小路東洞院西	探幽龍
109	梅林	烏丸四条下る	岸恭押絵張山水
110	井上	烏丸四条下る	周山馬
111	田中	四条烏丸西	応瑞、応震合作群鶴

112	野村	四条烏丸西	光琳流水草花／花鳥時代
113	前田	四条烏丸西	蘆雪芭蕉と藤
114	中島	富小路四条下る	東溪山水
115	竹中	富小路四条下る	一消百老
116	伊藤	室町綾小路角	信天翁易安押絵張
117	谷利	室町綾小路角	景文草花
118	笠原	室町綾小路角	光琳菊水
119	西山	室町綾小路角	蕭白二枚折
120	西垣	新町綾小路下る	光琳草花
121	清水	新町綾小路下る	梅嶺鶴
122	辻村	新町綾小路下る	応孝鯉
123	今西	新町綾小路下る	横山嶺山七賢人
124	松村	新町綾小路下る	始興山水
125	中川	新町綾小路下る	清暉山水
126	川北	新町四条上る	岸良岩上鷺／宗達／光琳草花
127	村田	新町四条上る	宗達菊
128	西羽	新町四条上る	奇峰馬／玉童山水
129	今井	四条烏丸角	始興巻狩
130	木村	東洞院綾小路下る	山陽の書／曾文山水
131	坪田	東洞院綾小路下る	横山嶺山唐山水／文隆耕作
132	佐野	東洞院綾小路下る	文麟日月
133	下村彦	東洞院綾小路下る	貞發狩獵の図
134	下村興	東洞院綾小路下る	光琳群鶴
135	下村萬	東洞院綾小路下る	素駒押絵張
136	山脇	東洞院仏光寺下る	曾文押絵張
137	斎藤	東洞院仏光寺下る	米草押絵張
138	柏木	東洞院仏光寺下る	月洲京名所
139	早藤	東洞院仏光寺下る	源瑞海岸の虎
140	角田	東洞院仏光寺下る	米草樓閣唐人物
141	柴田	東洞院仏光寺下る	探索押絵張
142	福田	松原諏訪町	永徳誰が袖
143	西村	烏丸松原上る	米斗鶴押絵張
144	中野	烏丸松原上る	岸駒押絵張
145	佐野	烏丸松原上る	岸嶺山水
146	西川	烏丸高辻上る	海屋大書
147	中村	烏丸高辻上る	清暉押絵張
148	栗田	烏丸高辻上る	若冲鶴
149	中村	烏丸高辻上る	徹山鹿
150	高橋	烏丸仏光寺上る	直庵鷹
151	伊吹	烏丸仏光寺上る	春雨山水
152	外村	烏丸綾小路上る	海屋書
153	篠田	烏丸綾小路上る	梅逸押絵張

表3-2 明治45年の画派の分類

円山四条	28
岸派	19
琳派	18
狩野派	17
近代画家	16
古画	15
文人画	9
諸画派	31
書屏風	21
計	174